

## 医療復権のための療術

二十世紀の百年間における西洋医学の進歩には目を見張るものがあります。外科学一つとっても、二十世紀初頭にやっと成人の鼠径ヘルニアの手術が端緒を開いたのに世紀末には臓器移植手術が花ざかりというのですから、今昔の感に耐えないとはこのことです。

しかし輝きが増せば増すほど、その影の部分も濃くなるものです。人々の間に、医療イコール医学という錯覚が生まれ、医療の真ん中に医学がでんと居坐ってしまったのです。現在の殺伐たる医療の最大の要因はここにあります。

本来、医療と医学は別のものなのです。医療が戦いの最前線なら、医学は兵站部（ロジスティクス）なのです。医学は少し後方に控え、最前線が必要とする武器や弾薬や食糧を的確に届けることにその役割があります。

そのためにはいつも、性能のよい戦術を用意しておかなくてはなりません。性能のよい戦術とは客観性と再現性のある科学的根拠（エビデンス）に裏打ちされた「治し」の戦術です。

一方、医療はというと、ただ戦術を並べ立てればよいというものではありません。複数の戦術を統合して戦略に止揚してはじめて、本当の温もりある自然治癒力の高い医療が出現するのです。

戦略とは治しと癒しの統合です。治しが身体の一部に生じた故障を修理することなら、癒しは生命力の向上を計ることです。生命力とは生命に自然治癒力の加わったもの。生命についても自然治癒力についても、いまだ科学がこれらを十分に解明してはいません。科学が解明している世界を対象とする癒しの術が、エビデンスに乏しいのは仕方ないことなのです。

手にしたエビデンスは大いに活用させていただくとして、エビデンスの不足分は直観で補えばよいのです。さらに、この直観とは、一般の、あるとき脈絡もなくひらめくというものではありません。より思考に近い、ベルクソンの哲学的直観とかクラウゼヴィッツの戦略的直観です。

左脳がエビデンスを、右脳が直観を司るように、私たちはエビデンスと直観を統合することによって生を全うしているのです。医療も、その生を全うする上での一つの領域には違いありません。当然のことながら医療もエビデンスと直観の統合の上に成り立っているのです。

療術とは、これまで癒しの方法の一つと考えて来ました。戦略の片棒を担ぎ、医療の一翼を担うのですから、それはそれで存在意義は十分にあります。しかし、この度の卒業論文を散見するところ、すでに治しと癒し、エビデンスと直観とが統合されているではありませんか。しかもきわめて個性的に。

そうです。療術とはそのまま医療そのものだったのです。あなたがたは医療復権のための戦士なのです。このことを大いなる誇りとしながらそれぞれの道を邁進して行って下さい。

ご健闘を祈ります。